展覧会記録
特別企画展「五高と戦争 ―戦時体制下の五高生たち―」

薄田千穂　五高記念館研究員

開催趣旨と概要

1931(昭和6)年の満州事変から15年におよぶ戦争は、旧制高等学校にも大きな影響をおよぼした。それは長髪や行事の制限、修業年限の短縮、学徒出陣、学徒動員など、教育のみならず生活全般におよんだ。

五高記念館が所蔵する第五高等学校(以下五高と記述する)の学校資料のなかには、写真、軍事郵便、勤労動員・学徒出陣関係資料など戦時期の資料があり、調査・研究を進めている。

第二次世界大戦敗戦から70年を機に、五高にとっての戦時を資料により通観し、戦争は教育にどのような影響を与えるのか考える機会としたいという趣旨で、特別企画展「五高と戦争―戦時体制下の五高生たち―」を開催した。概要は以下のとおりである。

会場：五高記念館第1企画展示室・第2企画展示室、展示資料点数約80点
会期：2015(平成27)年8月6日～12月21日、116日間　来場者8,039人
主催：五高記念館
共催：五高記念館友の会
後援：熊本県教育委員会、熊本市教育委員会

展示に至る調査・研究

五高記念館は、2006年に館内に事務室を設置し、週日開館を開始した。2007年、五高開校120周年記念式典が行われ、これを機に卒業生との交流が活発になった。式典に参加した五高の卒業生は戦中、戦後に五高に在学した世代である。

2009年、五高記念館は卒業生へアンケート調査「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」を実施し、配布1336人に対して275人の回答を得た。回答者のうち3分の2が戦時中に五高に在籍しており、学校生活、寮生活に加えて、勤労動員、学徒出陣などの記録・手記を得ることができた。

2010年3月に昭和18年卒業生による座談会を行い、「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」の報告を兼ねた『第五高等学校における軍事教練・査閲』をまとめた。この報告書をきっかけに五高からの学徒出陣経験者(昭和19年卒業生)から、座談会を開いて欲しいとの要望があり、2010年11月に座談会を開催、五高記念館叢書1号『第五高等学校の学徒出陣』を刊行した。さらに2016年五高記念館叢書2号『第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員』を刊行した。

資料収集に関しては、継続的に呼びかけを行い、学校資料やアルバム・写真などの寄贈を受け、資料と情報の集積を行ってきた。

展示室入口

展示内容

本展覧会では、1931（昭和6）年の満州事変から1945（昭和20）年の敗戦までの15年を対象とした。

この時期に五高で起った象徴的な出来事を軸に編年で構成することとし、「Ⅰ国家総動員」、「Ⅱ軍事教練」、「Ⅲ勤労動員」、「Ⅳ学徒出陣」を設けた。象徴的な出来事として取り上げたのは、Ⅰでは「断髪令」「寮生誓詞の改定」、Ⅱでは「査閲事件」、Ⅲでは三菱長崎造船所への動員、Ⅳでは入隊した生徒のエピソードである。「Ⅴそれぞれの戦争」では、教員・生徒個人の戦争体験を著作等から取り上げ、別の視点から戦争を表した。

展示配置については、第1企画展示室に背景説明、Ⅰ、Ⅱに関する資料、第2企画展示室にはⅢ、Ⅳ、Ⅴに関する資料を配した。それぞれの展示室には、展示用の壁4面と展示台を設置し、壁には解説・写真・資料のパネル、展示台には、軍事郵便、学徒出陣壮行会送辞・答辞、勤労動員感謝状、五高の学校資料等、原本を展示した。原本は資料への影響を考慮して6期に分け、入れ替え展示を行った。また、期間中に情報が提供された薬莢、五高生の手紙も随時展示した。

展示の構成・配置、キャプション執筆については、全体説明とⅠ～Ⅳを薄田千穂、Ⅴを藤本秀子が担当した。チラシデザイン、キャプションデザイン・制作は市原富代が担当した。

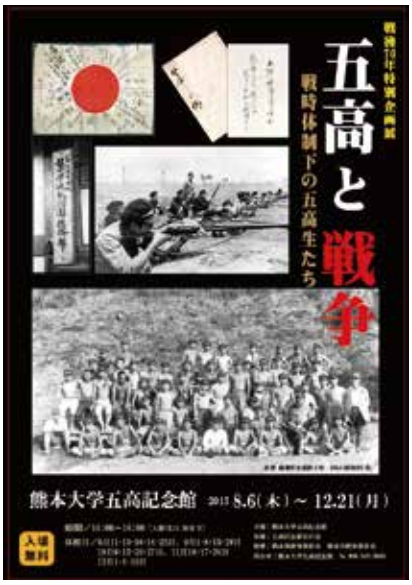
まとめ

展覧会開催日には、テレビ局、新聞社等多くの取材があり、即日ニュース放映された。特に注目を集めたのは、学徒出陣に関する資料や写真であった。戦後70年の関心の高さを実感した。

会場に設置した感想ノートには、75件の記載があった。戦争についての展示を行うこと、戦争の表し方についての疑問もみられたが、全体としては、勤労動員、学徒出陣した生徒たちに思いをはせ、戦争を考えるいい機会になったという感想が多かった。

展示では「戦争」の事実を客観的に取り上げることに努めた。事実は取り上げかたによって見える側面が変わってくるため、常に賛否両論を想定しなければならないことを実感した。また、展示では背景説明が多くなり、実際に五高生が何を考え、対応したかについての部分を描ききれなかった。

学徒出陣や勤労動員の実態については、まだ明らかでないことが多い。また、戦時の学校内や寄宿寮で生徒たちの生活がどのように変化し、生徒たちがどのように考えていたかについても、さらに検証が必要である。今後も調査・研究を重ね、このような機会に備えたい。



第1企画展示室

第2企画展示室

「五高と戦争ー戦時体制下の五高生たちー」展示資料

■戦争と教育〔解説パネル〕

1931（昭和6）年の満州事変から1945（昭和20）年の敗戦まで15 年におよぶ戦争により、日本は国内及び関係諸国に甚大な被害をもたらした。 戦争を遂行するために国家総動員の政策がとられ、戦争・軍需を最優先し、国民生活を全面的に統制する体制が作られていった。 教育界でも、学生の思想善導のため文部省の組織が拡充されていき、1937（昭和12）年に国民全ての精神動員を担当する教学局が新設された。 また、同年12 月に設置された教育審議会で、総動員体制を支える教育改革の立案が行われた。 これにより1939（昭和14）年には青年学校の義務制、1941（昭和16）年には国民学校制度が実施され、皇国民の練成という戦時教育が強化されていった。 1942（昭和17）年には学徒出動命令による学徒の勤労動員が開始され、1943（昭和18）年には徴兵延期停止による学徒出陣が行われた。 1945（昭和20）年3月18日には「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、国民学校初等科を除く学校の授業が4月から一年間停止することとなり、決戦体制の下、教育は崩壊していった。 この中で、五高は昭和6年に陸軍特別大演習で昭和天皇を迎え、昭和12年の国民精神総動員運動の中、断髪の自主的遂行、校友会の報国団への編成替、寮生誓詞から自治の削除など戦時体制確立の影響を受けていった。 昭和18年には学徒出陣が行われ、昭和19年には断続的に勤労動員が行われるようになる。昭和20年には授業がなくなり、学校から生徒が姿を消していった。

1、戦争関係年表

1931（昭和6）年～ 1941（昭和21）年〔資料〕

Ⅰ 国家総動員

■戦時体制へ〔解説パネル〕

国民精神総動員運動は、国民を戦争に動員するために行われた政府による「国民運動」である。 1937（昭和12）年7月7日の日中戦争開戦後、8月24日には「国民精神総動員実施要綱」が閣議決定され、これに関する通牒が次々に出されて、全国的に展開された。 1938（昭和13）年には国家総動員法が出され、政府が国家の人的、物的資源を統制・運用できることになり、戦時体制が確立していった。 1939（昭和14）年7月に生活を戦時態勢化するための刷新項目として、男子学生・生徒の長髪廃止、女性のパーマネントや華美な化粧・服装の廃止などが挙げられた。 この動きを受けて、五高では、習学寮惣代が自主的な断髪を呼びかけ、議論の末に6月18日をもって断髪することを決議した。 1940（昭和15）年には全国の高等学校の寮や部活動が報国団に改組された。 五高でも、1890（明治23）年に設立した校友会「龍南会」が「龍南学徒報国団」となり、習学寮の玄関に掲げられていた「寮生誓詞」から「自治」の二字が削除された。また、この年から街に出ていた生徒が飲食店・遊技場から警察署に連行される「学生狩り」が行われるようになった。 1942（昭和17）年頃には、警察・特高・憲兵が干渉するようになり、特高が寮内

2 長髪最期の日　1939（昭和14）年6月17日

3 総務部が貼り出した断髪の檄

の図書室や寮生の蔵書を検閲するために出入りするようになっていった。

2、長髪最期の日

1939（昭和14）年6月17日〔写真パネル〕

1939（昭和14）年5月頃、文部省から断髪令が下るという噂が広がり、命令によって断髪することを恥とした3年生が自発的な断髪を決議した。2年生、1年生から反対意見や抗議行動もあったが、6月18日の寮生大会で決議され、断髪することに決定した。写真は、6月17日の文科2年2組の教室の様子。黒板には批判的な意見も見える。しかし、3年生が卒業し、2年生が惣代になると、長髪は黙認となった。

3、総務部が貼り出した断髪の檄

1939（昭和14）年6月17日〔写真パネル〕

4、龍南学徒報国団総務部の看板

1940（昭和15）年〔写真パネル〕

1940（昭和15）年9月17日の「修練組織強化ニ関スル件」により、全国の高等学校の寮や部活動が報国団に改組された。五高でも、1890（明治23）年に設立した校友会「龍南会」が1940（昭和15）年11月12日に「龍南学徒報国団」となった。

5、報国団編成の変遷図〔解説パネル〕

6、寮生誓詞　1935（昭和10）年　1941（昭和16）年〔写真パネル〕

1940（昭和15）年10月18日、惣代と生徒課により寮生規約の再検討が行われ、惣代・委員の選挙が廃止された。文部省からの要請で、1919（大正8）年に作られ、習学寮の玄関に掲げられていた「寮生誓詞」の綱領第三項が改訂され、「自治」の文字が姿を消した。

7、奉安殿参拝

1942（昭和17）年、1941（昭和16）年〔写真パネル〕

1916（大正5）年6月に武夫原の北東隅に建設された奉安殿は、昭和11年3月に武夫原の南東隅に移設された。昭和16年に習学寮内で生活日課の刷新が唱えられ、有志による朝起床後の奉安殿参拝が始まった。写真は習学寮の日課に張り出された奉安殿参拝を呼びかける張り紙と、参拝の様子。

8、1940（昭和15）年の第五高等学校配置図〔資料パネル〕

9、新聞記事のコラージュ

1930（昭和5）年　1940（昭和15）年〔写真パネル〕

五高生が、卒業時に製作したアルバムに貼付された新聞記事のコラージュ写真

10、戦時の入学者数、在学年限の変遷表〔解説パネル〕

11、龍南学徒報国団　1940（昭和15）年11月〔資料〕

「龍南会」から改組された「龍南学徒報国団」の書類

12、『龍南』248号　1941（昭和16）年2月25日〔資料〕

13、『龍南』250号　1942（昭和17）年2月15日〔資料〕

14、『皇民の友』　1943（昭和18）年10月1日〔資料〕

15、『現行学校防空関係通牒ならびに改訂局防空必携』1943（昭和18）年8月〔資料〕

16、『時局と娯楽問題』

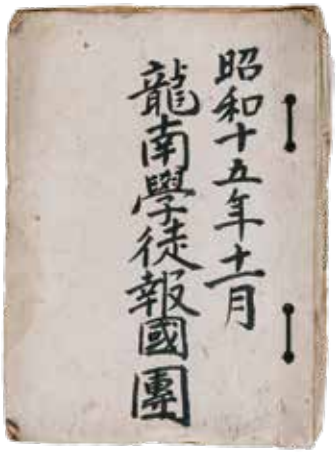
1938（昭和13）年3月24日〔資料〕

17、防空警備に関する書類

1937（昭和12）年5月14日〔資料〕

18、龍南学徒報国団の印　1940（昭和15）年〔資料〕

7　奉安殿参拝　1941（昭和16）年



11　龍南学徒報国団

II 軍事教練

■兵式体操　修学旅行　発火演習〔解説パネル〕

高等学校では当初から体操が必修であり、兵式体操が取り入れられた。その指導には退役下士官が当たっていた。また、1891(明治24)年頃から学校行事として行われていた修学旅行は、軍隊組織とするという規程があった。1906(明治39)年からは体操科の一環としての発火演習となり、毎年1回行うように規程された。1916(大正5)年には野外演習・射撃演習となっている。

19、野外演習　山鹿市郊外
　1919(大正8)年11月19日〔写真パネル〕

20、上熊本駅から野外演習へ出発
　1924(大正13)年〔写真パネル〕

■陸軍特別大演習〔解説パネル〕

陸軍特別大演習とは、天皇が大元帥として統監する陸軍の大規模な演習で、原則として毎年1回、1892(明治25)年から1936(昭和11)年まで全国各地で行われた。熊本では1902(明治35)年と1931(昭和6)年に行われている。昭和6年の演習にともない、道路の舗装等、街路が大規模に整備された。

1931(昭和6)年の陸軍特別大演習は、11月12～14日に御船、山鹿、熊本市街地など広範囲に展開された。昭和天皇は、11月15日帯山練兵場で大観兵式のあと、県庁をまわり、五高に来校した。五高では、あらかじめ「行幸奉迎事務分掌規程」を定めて総務部・陳列係・競技係・生徒係・接待係・警備係・設備係・衛生係・楽隊係・記録係・写真係・経理係を設け、準備を行っている。陣頭指揮を取った校長武藤虎太は、1924(大正13)年に四高校長として、陸軍特別大演習を経験していた。当日は、教官図書閲覧室に天覧品陳列室を設け、『古今余材抄』『檜垣姫家集註』『人国記』『肥後物語』『国賢帖』、しらうおの標本、立田山八重くちなし、鉱物などを陳列したと記録されている。その後武夫原で、400mリレー、円盤投げ、走り高跳び、ラグビー試合など、生徒が運動競技を行った。18日に帯山練兵場で行われた親閲式には五高生も参加している。

21、陸軍特別大演習　武夫原
　1931(昭和6)年11月15日〔写真パネル〕

22、陸軍特別大演習　親閲式
　1931(昭和6)年11月18日〔写真パネル〕
　11月18日帯山練兵場で行われた親閲式には県下の男女学生・青年訓練所・男女青年団・在郷軍人など約6万5000人が参加した。この写真が貼付されているアルバムには五高生が先頭にいると記されている。

■軍事教練と配属将校〔解説パネル〕

1925(大正14)年、陸軍現役将校学校配属令が制定され、官公立の師範学校、中学校、高等学校、専門学校等の男子生徒は配属された陸軍現役将校の直接の指導のもとに学校教練を修めた。五高の教練は、武夫原、帯山練兵場、春日射撃場で、行軍や実弾演習などが行われた。配属将校はおおむね40代後半から50代であり、卒業生の回顧や証言によると、生徒たちに好意的であったようである。

■査閲事件〔解説パネル〕

『五高五十年史』『続習学寮史』に「査閲事件」という出来事が記されている。1943(昭和18)年6月に熊本

21　陸軍特別大演習　武夫原

師団兵務部長山口陸軍少将が講堂で講演した。 最初から服装、態度などについて五高生を非難したため、満場の生徒が哄笑し、2階にいた3年生が下駄を鳴らして妨害した。 山口少将は激怒し講演を途中で中止し退席した。その年、山口少将は教練査閲官として再来校し、教練に対し悪評を下した。 山口少将が「五高卒業生は、今後、特幹の試験にはパスさせまい。」と放言したことで、教職員は苦慮したようである。 しかし、生徒を叱責はしなかった。 この事件との関連は定かではないが、その後、添野校長、配属将校深草大佐は満州へ転勤になった。

23、熊本市街地図　1936（昭和11）年〔資料パネル〕

中央付近の熊本城に第六師団、五高の南側、白川対岸に渡鹿練兵場、熊本駅近くに春日射撃場があった。 地図の範囲外になるが、渡鹿練兵場の東側に帯山練兵場が位置し、さらに東側に、三菱重工業熊本製作所、附属飛行場がひろがっていた。

24、武夫原で教練　1924（大正13）年〔写真パネル〕

25、渡鹿練兵場　1926（大正15）年〔写真パネル〕

26、分列式　1930（昭和5）年〔写真パネル〕

27、実弾演習　1932（昭和7）年〔写真パネル〕

28、武夫原で整列　1941（昭和16）年〔写真パネル〕

29、武夫原での教練　1941（昭和16）年〔写真パネル〕

30、実弾演習　1943（昭和18）年〔写真パネル〕

31、軍事郵便〔資料〕

戦地から自国宛て、もしくは戦地に宛てて自国から発送される郵便のこと。 五高記念館では、五高の卒業生・教授が入隊先から校長や教職員へ送った手紙・葉書76通を所蔵している。※入れ替えで展示

32、薬莢　年代不明〔資料〕

1994（平成6）年黒髪北地区9406調査地点（武夫原グラウンド）出土、約47個出土したうちの10個、長さ5.85cm　軍事教練で使用されたものと思われる。 熊本大学埋蔵文化財調査センター所蔵

Ⅲ 勤労動員

■勤労奉仕・学徒動員〔解説パネル〕

1938（昭和13）年6月文部省は「集団的勤労作業運動実施に関する件」を通牒し、中等学校以上の生徒は夏季休暇中に5 日間、臨時に作業に従事させるということになった。 勤労動員のはじまりである。 1939（昭和14）年3月集団勤労作業は恒久化して、正課に準じて取り扱うこととなり、1941（昭和16）年2月には、1年に30日以内の日数は、授業に振り替えることが認められた。1944（昭和19）年1月には、「緊急学徒勤労動員方策要綱」で、動員期間は1年に4カ月を標準とすること、学校内に工場事業場を設けて学校内で従事できるよう規定された。 1944（昭和19）年8月には、「学徒勤労令」により、1年を通して勤労動員が行えるようになった。 1945（昭和20）年3月18日には「決戦教育措置要綱」により、4月から1年間、国民学校高等科から大学にいたる全校の授業が停止されることになり、五高でも授業は行われず、生徒は勤労作業に明け暮れることとなった。

33、菊池郡花房陸軍飛行場整地作業

1939（昭和14）年5月20日〔写真パネル〕

1938（昭和13）年8月30日から5日間、全校職員・生徒約800名が菊池郡花房陸軍飛行場（現、菊池市泗水町）へ電車で行き、桑根掘りや整地

24　武夫原で教練

33　菊池郡花房陸軍飛行場整地作業

作業を行った。翌14年5月20日から5日間にも同地で地均しや大木の切り株掘り出し作業を行った。このときはトラックに分乗して現地へ行った。

34、菊池郡花房陸軍飛行場整地作業の様子
1939（昭和14）年〔写真パネル〕

35、集団的勤労作業実施計画要項
1938（昭和13）年6月17日〔資料パネル〕

36、興亜青年勤労報国隊満州派遣学生隊見送り
1939（昭和14）年〔写真パネル〕
1939（昭和14）年7月、興亜青年勤労報国隊が編成され、青年、学生・生徒が北京周辺と満州に派遣された。編成にあたっては、大学、高等学校、専門学校、師範学校に割当があり、各高等学校には指導教官1人と生徒5人が割り当てられた。約1ヶ月、開墾・道路建設・各種技術作業指導等を行った。

37、引率教員小山直之の復命書
1939（昭和14）年9月26日〔資料パネル〕

38、報国隊編成表1941（昭和16）年〔資料パネル〕
1941（昭和16）年8月、文部省から各学校へ、全校を組織する学校報国隊の編成が訓令された。この後、学徒動員は学校報国隊として出動するようになった。

39、動員先一覧表〔解説パネル〕

40、農作業　1941（昭和16）年　1942（昭和17）年〔写真パネル〕

41、勤労動員集合写真　1944（昭和19）年11月〔写真パネル〕
佐賀で農業用水堤防工事を行った時の集合写真。写っているのは文科1年甲乙組、理科1年甲2組。前列右から3人目は引率の高木尚文教授

42、勤労動員感謝状
1944（昭和19）年9月20日〔資料パネル〕
三菱重工業長崎造船所に動員された理科3年4組（昭和19年卒）の生徒に贈られた感謝状。「戦時標準型船体模型」が贈られたことが記されている。

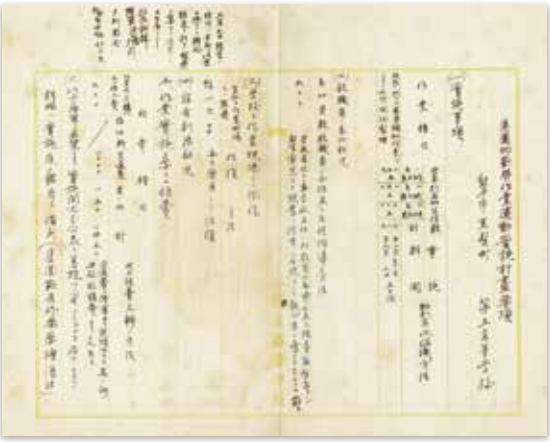
43、三菱重工業長崎造船所での鋲打ち作業
1945（昭和20）年〔写真パネル〕
4月11日に理科甲類2年生の中で約100名が三菱重工業長崎造船所へ動員され、終戦まで作業に従事した。長崎への原爆投下直後、救援に入り多くが被爆した。

44、五高報国隊長の印　1941（昭和16）年9月〔資料〕

45、三菱重工業熊本航空機製作所五高疎開工場で使われていた部品　1945（昭和20）年〔資料〕
1945（昭和20）年4月4日に、体育館に機材が運び込まれて工場となり、理科2年の生徒が重爆撃機「飛龍」の部品を製作した。この部品は、終戦後体育館の床が張り替えられた折に、外に出されていたもので、工場内で使用されていたものと思われる。そのときの在校生が持って帰り、70年ぶりに五高に帰還した。五高工場で部品が製作された「飛龍」は1機だけ完成し、五高上空を飛んだという証言がある。

46、「飛龍」模型〔資料〕
五高工場で部品が作られていた三菱キ67四式重爆撃機「飛龍」の72分の1模型

47、表彰状　1944（昭和19）年9月20日〔資料〕
三菱重工業株式会社長崎造船所に動員されたときのもの


35　集団的勤労作業実施計画要項

41　勤労動員集合写真

48、賞状　1945（昭和20）年2月27日〔資料〕
佐世保海軍工廠へ動員された時のもの

49、表彰状　1945（昭和20）年3月20日〔資料〕
三菱重工業株式会社長崎造船所に動員されたときのもの

50、三菱重工業長崎造船所小ヶ倉寮からの手紙
1945（昭和20）年8月2日〔資料複製〕
4月11日に理科甲類2年生の中で約100名が三菱重工業長崎造船所へ動員された。宿舎である小ヶ倉寮から両親に宛てた手紙。この7日後には長崎市に原爆が投下されている。手紙を出した廣松敏生は、投下直後、市外に入り被爆した。

Ⅳ 学徒出陣

■学徒出陣〔解説パネル〕

戦前の徴兵制度では、男子は2才になると兵役の義務があったが、中学校以上の在学者は徴集が延期されていた。しかし、徴集の延期期間が短縮されていき、1943（昭和18）年10月1日、「在学徴集延期臨時特例」により、徴集延期は廃止された。これにより、20才以上の生徒が徴兵検査を受けることになった。ただし、理科系には入営延期の措置がとられ、主に文科の学生・生徒が入営した。五高の徴兵延期停止による入隊者は、12月1日に陸軍が37人、12月10日前後に海軍へ11人である。また、1カ月後に特別志願制度により陸軍へ2人が入隊した。1944（昭和19）年には、海軍予備学生、陸軍特別幹部候補生が募集され、9月30日に海軍予備学生21人、10月10日に陸軍特別甲種幹部候補生34人、翌20年1月10日に陸軍特別甲種幹部候補生19人が入営している。1943（昭和18）年から1945（昭和20）年まで230人が徴集された。

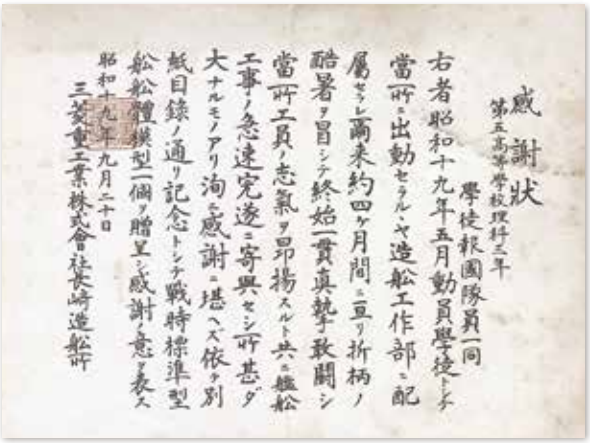
51、入隊者一覧　1943（昭和18）年12月1日～1945（昭和20）年8月8日〔解説パネル〕

52、学徒出陣の掲示　1943（昭和18）年10月〔写真パネル〕
入隊者の壮行会は10月13日午後1時より講堂で行われた。添野信校長の壮行の辞、職員代表竹原東一教授の挨拶、龍南学徒報国団理科代表幹事森俊世の生徒総代の送辞のあと、同文科代表幹事桟熊獅（かけはしくまし）の答辞があった。

53、習学寮の学徒出陣壮行晩餐会
1943（昭和18）年10月〔写真パネル〕
習学寮の出陣学徒壮行晩餐会の様子。寮からは7人の生徒が入隊した。

54、学徒出陣壮行歌（『龍南』254号　昭和19年6月15日）　1943（昭和18）年〔資料パネル〕
龍南会総務部が壮行歌を募集した。10数編の歌詞が寄せられ、上田英夫、高森良人、藤井外輿ら3人の教授が選考を行った結果、文科1年4組の木庭立夫の歌詞が選ばれた。作曲は音楽部（主として理科2年4組高津幸弘）が担当し、壮行歌が完成した。発表会は11月18日に開催された。

55、文科2年甲2組の加田勉と東泰彦
1943（昭和18）年〔写真パネル〕
加田勉は1942（昭和17）年入学、馬術部主将、18年度習学寮惣代。昭和18年12月1日四日市歩兵聯隊入営。昭和20年6月19日ルソン島ピンキャンで戦死。東泰彦は昭和17年入学、昭和19


感謝狀
第五高等學校理科三年
學徒報國隊員一同
右者昭和十九年五月動員學徒トシテ
當所ニ出動セラルヤ造船工作部ニ配
屬セラレ爾來約四ヶ月間ニ亘リ折柄ノ
酷暑ヲ冒シテ終始一貫真摯敢闘シ
當所工員ノ志氣ヲ昂揚スルト共ニ艦船
工事ノ急速完遂ニ寄與セシ所甚ダ
大ナルモノアリ洵ニ感謝ニ堪ヘズ依テ別
紙目錄ノ通リ記念トシテ戰時標準型
船舶體模型一個ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス
昭和十九年九月二十日
三菱重工業株式會社長崎造船所

42　勤労動員感謝状

43　三菱重工業長崎造船所での鋲打ち作業

年卒業。昭和19年海軍予備学生として入営。

56、加田勉の短歌集「生命の旅」　1943（昭和18）年〔資料パネル〕

加田勉が学徒出陣に際して詠んだ短歌集「生命の旅」はクラスメートの東泰彦に託された。

57、昭和18年一寮生〔写真パネル〕

前列左から、棧熊獅（出陣学徒壮行会で答辞を読んだ）、三宮晴夫、後列左から加田勉、泉宗一、山村直資。棧、加田、三宮は12月1日に、泉は昭和19年1月20日に入隊した。

58、文科2年甲3組の学徒出陣壮行会
1943（昭和18）年〔写真パネル〕

熊本市上通の「やぶそば」で催された。左側中列端がクラス担任の三浦靭郎教授（ドイツ語）。このとき、「ああ楽しかった。これでもう死んでもいいな」と言った生徒に対して「バカなことを言ってはいけない。君たちは必ず帰ってきてハイゼの残りを勉強するんだよ」と諭したという回顧談がある。三浦教授も1944（昭和19）年3月に応召した。

59、寄せ書き　1943（昭和18）年〔資料パネル〕

廣瀬隆一（昭和17年入学、昭和19年卒業。昭和18年12月1日入隊、北支方面軍に所属、河北・河南省を転戦、昭和21年復員）が入隊する際、同級生から贈られた寄せ書き

60、寮務日誌　1945（昭和20）年8月15日〔資料パネル〕

午後1時に学校長から「大詔」についての発表があり、3日間の休校となった。寮内は静粛で謹慎しているかのようであり、「悲痛極まり無く暗涙催す者あり」と記されている。

61、答辞　1943（昭和18）年10月13日〔資料〕

学徒出陣壮行会で文科代表棧熊獅が読んだ答辞

62、送辞　1943（昭和18）年10月13日〔資料〕

同理科代表森俊世が読んだ送辞

63、学徒出陣壮行会の書類
1943（昭和18）年10月13日〔資料〕

64、学徒出陣寄書　1943（昭和18）年〔資料〕

昭和18年、前年3月文甲2組を卒業した27名が、学徒出陣の日を前に熊本に集り、今生の思い出にと阿蘇山上で武夫原頭を乱舞した。この寄書はそのとき作成され、各人が出陣に際し携えた。

65、短歌集「生命の旅」
1943（昭和18）年11月23日〔資料〕

加田勉が東泰彦に託した短歌集

66、短歌　1943（昭和18）年10月〔資料〕

加田勉が、学徒出陣にあたり炊事部日計表用紙の裏に残した短歌

67、徴集者名簿　1943（昭和18）年12月1日～
1945（昭和20）年8月8日〔資料〕

在学のまま徴集された生徒の氏名や入営期日・入営部隊名などを記した記録簿。230人の記載がある。入営以後の動向は記載されていないため、徴集者のその後については不明である。

68、徴兵検査旅行証　1944（昭和19）年5月26日〔資料〕

三菱重工業株式会社長崎造船所に動員されていた理科三年の生徒が、徴兵検査のため帰郷する際に、教官によって発行されたものである。1941（昭和16）年から乗車券の発売制限など一般の

45　三菱重工業熊本航空機製作所五高疎開工場で使われていた部品

52　学徒出陣の掲示

旅行が抑制されていたが、1944（昭和19）年4月1日から、遠距離の乗車旅行をする場合、旅行証明書が必要となっていた。

69、『龍南』254号　1944(昭和19)年6月15日〔資料〕

五高の校友会雑誌で戦前最後に発刊されたもの。「壮行歌」「学徒出陣の記」が巻頭に掲載されており、学徒出陣壮行会の様子が描かれている。学徒出陣・動員に関する記事が多く見られる。龍南学徒報国団総務部は、市内の部隊を訪れ、学友・先輩を激励慰問した。入営者から第五高等学校の学友に手紙が届くこともあった。

70、『航空決戦と学生』　1943（昭和18）年6月30日〔資料〕

71、『学徒出陣』　1943（昭和18）年6月30日〔資料〕

72、『第五高等学校の学徒出陣』に寄稿された山下善睦氏の原稿　2009（平成21）年〔資料〕

2009（平成21）年、五高記念館に送られてきた手記。家族にも明かさなかった戦争体験を綴った渾身の原稿である。山下善睦　昭和17年入学、昭和19年卒業　文甲1組、1943（昭和18）年12月1日入隊、フィリピンルソン島で戦闘、終戦を迎える。2012年逝去。

73、『第五高等学校の学徒出陣』2012（平成24）年3月31日〔資料〕

学徒出陣経験者の座談会・手記、五高記念館所蔵の学徒出陣関係資料を掲載している。

V それぞれの戦争

重光　葵

1887（明治20）年7月29日～1957（昭和32）年1月26日

1904（明治37）年入学～1907（明治40）年 独法卒業

1911（明治44）年外務省入省。1932（昭和7）年「上海天長節爆弾事件」により、重傷を負い右足を切断した。その後、駐ソ公使、駐英大使を歴任し、欧州における開戦時には日本の非介入などに努力しながらも果たせず、日米開戦を回避することはできなかった。戦争中、東条内閣と小磯内閣において外務大臣を務め、敗戦直後の東久邇宮内閣で外務大臣に再任、全権として降伏文書調印を行った。

戦時の外交責任者としてA級戦犯の訴追を受けて服役した後、政界に復帰、1954（昭和29）年12月から1956（昭和31）年12月まで鳩山内閣において四度目の外務大臣を務め、1956年12月18日国際連合への加盟を果たした。その際、行った演説では日本国民が恒久の平和を維持し、世界平和のために貢献することを高らかに宣言している。

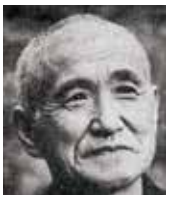
> 開戦に際して「日本は卑しくも東亜民族を踏み台にしてこれを圧迫し、その利益を侵害してはならない。なぜならば武力的発展は東亜民族の了解を得ることができぬからである」と述べている。（『昭和の動乱』より）

当時のことについては『昭和の動乱』『外交回想録』『重光葵手記』『巣鴨日記』などに詳しい。

64　学徒出陣寄書

65　短歌集「生命の旅」

北御門 二郎



1913（大正2）年2月16日～
2004（平成16）年7月17日

1930（昭和5）年入学～
1933（昭和8）年 文甲卒業

熊本県球磨郡湯前村（現 湯前町）のギリシャ正教を信仰する家庭に生まれた。五高在学中にトルストイの作品を読み、キリスト教に根ざした絶対的非暴力の考え方に共感し、東京帝大在学中、徴兵猶予願を提出せず、徴兵拒否を行おうとした。母の説得により徴兵検査会場へ出向いたものの「精神に異常をきたした病人」のように扱われ、「兵役とは無関係」とされた。

その後、帝大を中退し球磨郡市房山の山麓で農耕生活に入り、戦後も一貫して農業者として生きるかたわら、トルストイの全訳に取り組んだ。1937（昭和12）年6月の日記には下記のように記した。

> 「博大な心は己を世界の市民と考え、人類の全てを己が同朋と感ずる。さればそこに国家観念、民族観の介入する余地はなくなる。世界の市民と感ずれば、国防なるものは一体だれからだれを護るためのものとなるであろう」（『くもの糸　北御門二郎聞き書き』より）

戦争当時のことは『ある徴兵拒否者の歩み トルストイに導かれて』『くもの糸 北御門二郎聞き書き』に詳しい。

梅崎春生

1915（大正4）年2月15日～
1965（昭和40）年7月19日

1932（昭和7）年入学 ～
1936（昭和11）年 文甲卒業

福岡市の中心部である簀子町（すのこまち）（現 福岡市中央区大手門）に生まれた。五高在学中から校友会雑誌『龍南』に数々の作品を発表し、東京帝国大学文学部を、「入学最初に出そびれてついに講義には一度も出席しなかった」という状況ながら卒業し、東京市教育局教育研究所に勤務した。

1944（昭和19）年6月に召集され、佐世保海兵団を皮切りに九州内の基地を転々とし、終戦間際の1945（昭和20）年7月、桜島の基地に赴任した。この時の経験をもとに1946（昭和21）年、『桜島』を発表、作家としての地位を確立した。

1954（昭和29）年、『ボロ家の春秋』で第32回直木賞を受賞。1965（昭和40）年に亡くなるまで、市井の隅に生きる人々を描いた多くの作品を残した。

> 「片膝をついて、私は彼の身体を起こそうとした。首が、力なく向きをかえた。無精髭を少し伸ばし、閉じた目は見違えるほど窪んで見えた。弾丸は、額を貫いていた。流れた血の筋が、こめかみまでつづいていた。苦悶の色はなかった。薄く開いた唇から、汚れた歯が僅かに見えた。不気味な重量感を腕に感じながら、私は手の甲で涙をふいた。とうとう名前も、境遇も、生国も、何も聞かなかった。」（『桜島』より）

戦争当時や従軍中のことは、『桜島』をはじめとする多くの作品に詳しい。

李（イ） 佳炯（カヒョング）

1921（大正10）年3月29日～
2001年10月

1938（昭和13）年入学～
1942（昭和17）年9月 文乙卒業

五高在学中は作家志望であり、朝鮮語の文学作品を翻訳し校友会雑誌『龍南』に発表したり、雑誌委員としてその編集に携わったりした。

1941（昭和16）年日米開戦の翌日、不当な逮捕拘束により卒業が遅れた。1943（昭和18）年東京帝国大学文学部仏文科在学中に朝鮮学徒志願兵として入隊。1944（昭和19）年にシンガポールを経てビルマ（現 ミャンマー）に入り、その後、兵士として一年間、捕虜として更に一年間をビルマに過ごした。

戦後は、韓国の大学でアメリカ文学、比較文学の教鞭を執るかたわら執筆や翻訳に携わり、韓国ペンクラブ副会長、韓国英文学会会長、韓国推理作家協会初代会長などを歴任した。

> 「兵士らは、生命をかけた戦争が実は生命をかけるほどのものでなかったのをいきなり悟ったようであった。無条件降伏をするなら何のためにそんな戦争をしかけたのか。開いた口がふさがらぬというものだ。今はもはや、天皇陛下万歳などと叫びながら死ななくてもいいのか、捕虜になる代りに手榴弾で自決しなくてもいいというの

か。」（『怒りの河　ビルマ戦線狼山砲第二大隊朝鮮人学徒志願兵の記録』より）

戦争当時のことは、『怒りの河　ビルマ戦線狼山砲第二大隊朝鮮人学徒志願兵の記録』に詳しい。

中野孝次

1925（大正14）年1月1日〜
2004（平成16）年7月16日

1944（昭和19）年入学〜
1947（昭和22）年 文乙卒

千葉県市川市に生まれた。大工だった父の考えから旧制中学に進学できず、専検（専門学校入学者検定試験）に合格し、文科入学者数が著しく少なくなるという難関の入学試験を突破して五高文科に進学した。

入学はしたものの、授業は停止され学徒動員により佐賀県での農業用堤防工事や、三菱重工業熊本航空機製作所での部品製作作業に従事した。終戦間際の1945（昭和20）年6月に召集により宇都宮の軍隊に入隊した。

戦後は大学で教鞭を執るかたわら作家となり、『清貧の思想』『ハラスのいた日々』などのベストセラーを含む多くの作品を残した。

「なぜ国のはじめた戦争なんかのために、このおれたちのいのちが断ち切られねばならないのだろう、と。頭はこの答えようのない疑問をめぐって堂々めぐりし、気持だけが暗く沈んだ。そういう瞬間にもふっと、もしかして今日にも召集令状が来るのではないか、と気になりだすときがあり、腰のへんから力の抜けるような恐怖がこみあげてきた。これから生きようというときにもう死ななければならないなんて、まったくなんて時代に生まれてきたんだろう、…」（『麦熟るる日に』より）

戦争当時のことは『麦熟るる日に』『五十年目の日章旗』などに詳しい。

ロバート・クラウダー
Robert H. Crowder

1911年8月14日〜
2010年12月8日

1939（昭和14）年9月1日〜
1943（昭和18）年7月31日英語教師として在籍

アメリカ合衆国イリノイ州に生まれた。大学卒業後、東洋絵画にあこがれ、平壌（現北朝鮮民主主義人民共和国の首都ピョンヤン）の外国人学校や東京で英語を教えながら日本画を学んでいたが1939（昭和14）年の夏、五高英語教師の職を得た。

五高では、「ラフカディオ・ナンバーツー」のあだ名を献上され、ユニークで効果的な授業で生徒達から慕われたが、1941（昭和16）年12月8日、日米開戦の日に敵国人捕虜として拘束された。この日が、クラウダーが五高の教壇に立った最後の日となった。1943（昭和18）年9月、日米の捕虜交換に応じて日本を離れることになるが、それまで熊本から長崎、横浜へと収監場所が移された。

帰国後は、日本画家として活躍し、設立したアート制作会社も大きな成功を収めた。日本ではクラウダーの消息は長らく不明だったが、1993（平成5）年10月彼の秘書から熊本大学に送られた手紙によって判明した。

その後、かつて教え子であった五高卒業生たちが渡米し旧交を温めたりしたが、クラウダー本人は第二の故郷と思い定めた日本へは二度と帰ることなく、2010（平成22）年12月8日にカリフォルニア州ロスアンゼルスで亡くなった。その日は、日米開戦からちょうど65年目の日であった。

「別れはあわただしく、心痛んだ。警官に連行されるかたちで家を出た。通りに出ると、商店主たちが店の表で頭を下げ、「サヨナラ、センセイ」と言っている。私は夢うつつのままに彼ら一人一人に頭を下げながら、やっと通りを抜けた。

私たちは、もともと日本人とアメリカ人としてではなく、互いに友人として知り合っていた。それを急に今、「敵」という言葉を当てはめられてもピンとこない。何とも場違いな感じだった。」（『わが失われし日本　五高最後の米国人教師』）

当時のことは『わが失われし日本　五高最後の米国人教師』に詳しい。